



高松

たかまつよめいりにんぎょう

高松嫁入人形

Takamatsu Yomeirinnyo

製作者 © 大崎豊五郎

高松市には、古くより嫁入りの際、近隣に人形を配るという婚礼習俗があり、そのため、練り物による人形がつくられてきました。今日、このような婚礼の風習は途絶えてしまいましたが、この嫁入人形は、高松の伝統的な郷土玩具として受け継がれてきています。その製法は、様々な型に原土をつめて型取りし、地塗りと彩色を施して仕上げるもので、素朴な味わいを今に伝えています。



高松

たかまつはりこ

高松張子

Takamatsu Hariko

製作者 © 乃村七重

高松市内の鍛冶屋町には、古くから玩具や人形を商う店が軒を連ね、様々なオモチャ類がつくられていました。張子細工もこの一つで、「デコさん」といわれる人形玩具や面などが、子供達の良き遊び友達となっていました。とりわけ、おマキ伝説にちなむ「ほうごさん」は、全国によく知られており、そのほのぼのとした素朴な味わいが多くの人々の共感を得ています。



三豊

はりこどら

張子虎

Harikodora

製作者 © 真鍋佳則
三宅修
田井民芸

張子虎は、中国の虎王崇拝がわが国に伝わり、つくり始められたといわれており、虎の武勇にちなんで、子供の健やかな成長を祈る気持ちから、端午の節句や八朔祭の飾り物として、古くから愛用されてきました。ピンと張ったヒゲやゆらゆらと揺れる振り子式の首などユーモラスなその姿は、郷土玩具や誕生祝、商売繁盛の縁起物としても喜ばれています。



観音寺 ほか

さぬき

讃岐かがり手まり

Sanuki Kagarimari

製作者 © 讃岐かがり手まり保存会

手まりは、平安時代に中国より伝えられたといわれており、清少納言の枕草子にも遊び事としてまりが登場してきています。初め、貴族の間で使われていたまりも、その後一般に普及し、わが国独特の美しい紋様が考案されて、今日でもその技法の伝承されたものが全国各地に見られます。観音寺地方におけるまりは、草木染による木綿糸を用いて、染糸1本1本を針でかがりながら、20余種の模様を描き出す技法に特徴があります。



琴平/三豊/観音寺

せっく にんぎょう

節句人形

Sekkinunyo

製作者 © (有) 東人形
(有) 大畑忠久商店
大畑喜子
尾幡初
四国人形(有)
陶川敏弘
真鍋啓三

わが国では、古くより子供達の安らかな成長を願って、全国各地で節句の行事が行われてきました。県内では、3月のひな節句、5月の端午の節句のほか、中・西讃地方には、旧暦8月1日の八朔に馬節句を行う風習があります。節句人形は、こうした祝事に欠かせないものとして、江戸期よりつくられているもので、熟練した職人の手により、約200にも及ぶ工程を経て仕上げられています。



坂出

てがこい

手描き鯉のぼり

Tegakikoinori

製作者 © (有) 井上製鯉商会
(有) 山下鯉織商会

5月5日の端午の節句は、古く中国から伝わったものですが、この節句に鯉のぼりが用いられ始めたのは、江戸時代の安永年間といわれ、鯉は化して竜になるという故事にちなみ、男の子の健やかな成長を願って、その形を模したものが立てられるようになりました。5月の薫風を腹一杯にはらみ、青空の下を泳ぐ鯉のぼりは、初夏の代表的な風物詩のひとつです。



高松/善通寺/三豊

さぬきししがしら

讃岐獅子頭

Sanuki Shishigashira

製作者 © 松下芳夫
丸岡光信
(有) 宮武嘉吉商店

神仏の祭りに登場する獅子頭の発祥は、応神天皇のころに中国から渡来し、奈良朝前期の伎楽面に由来すると言われています。讃岐の獅子頭は、あご、耳、取っ手など一部を除いて張子の手法によりつくられています。粘土や木の型に和紙を張り合わせ、型抜きをした後、胡粉や漆で素地をつくり、様々な装飾を施して完成となります。乾漆つくりのため軽量で丈夫なところが大きな特色です。



観音寺

きんしぎんしそしゅう

金糸銀糸装飾刺繍

Kinshiginshisousuyokushisyu

製作者 © 高木一彦
(有) むい屋
石川稔

わが国に刺繍の技法が伝わったのは、遠く飛鳥時代に仏教の伝来と共に中国よりもたらされたと言われています。その後刺繍は、貴族や武家、さらには一般庶民にも広まり、衣裳やふくさなどの生活用品や祭礼用具などにもその技法が用いられるようになりました。中・西讃地方の祭りに登場するチョーサ(太鼓台)の飾りにはこうした刺繍が施されており、その豪華さは他に類をみないものとして知られています。